教養主義と宗教信仰

１．斎藤貴男『「東京電力」研究－排除の系譜』を読む

元『日刊工業新聞』の記者であった著者が、長年にわたって会社の経営者、労働組合、政府、財界等の動きを観察してきて、戦後の GHQ の政策の変遷や九電力体制成立の経緯から、高度経済成長期を過ぎた 21 世紀初頭の原発事故と社会を覆う思想状況を克明に解析している名著である。

第３章・４章・５章は、この本の中核に位置し、木川田一隆・平岩外四という教養人が社長に就任した経緯とそれぞれの思想形成過程および果たした役割の客観的意味合いなどを分析している。

筆者がとくに注目したいのは、木川田が、自分の内面では高潔な教養主義を目指しながら、組織内の労働者たちに対しては、個人の内面に即した独自の思想確立を許さず、組織に従順な内面支配に至ったことを明示していることである。教養が豊かだとの世評が高い平岩も、政府の諮問委員会の座長について、今日の自民党の新自由主義システム推進の路線を敷く役目を果たした。

木川田が、学生時代に河合栄次郎の自由主義思想に強く共感し、同教授を尊敬していたことが、われわれに連なる問題である。教養主義は、ギリシア・ローマから、啓蒙主義、近代民主主義に連なる人間形成の理念が、世俗の個人の内面に深い教養を蓄えさせ、人格の完成に至らせるとする。評者の周辺においても学生時代は謙虚に教養を求める熱心な求道者であった友人たちがたくさんいたが、いずれも中年以降は組織の論理に忠実に振る舞い、独自の善悪判断を放棄して出世をめざす人物ばかりになった。とりわけ日本社会の病弊の背景には、終身雇用・年功序列が、組織的に各個人に対する利益誘導の働きをして、個人の自律的な人格確立をスポイルしてきたことが挙げられる。

教養主義に対する人間形成のもう一つの経路は、一神教の宗教教義を信仰するもので、救いも裁きも人間の外側から来る、つまり人間の内面において自発的な人格の完成は望めないとするものである。河合栄次郎と職場を共にして、異なる形で日中戦争に突入していく軍部批判を行った矢内原忠雄がその典型である[1]。教養主義は自分の内側において理念を生み出そうとする。歴史が示すところによれば、そのような志向は、本人の善意に係らず時代の波の中で、知らず知らずのうちに利益誘導の方向に引き込まれてしまう。他方、宗教信仰は、教義が外的かつ客観的に啓示されており、その時々の世相に合わせて変更されるものではない。

---

[1] 赤江達也『矢内原忠雄』岩波新書、2018 年

この本の中で、河合栄次郎を慕って社会思想研究会などに集った多くの進歩的文化人が、戦後の GHQ の資金協力に基づく「日本文化フォーラム」などを通じて「アメリカの手先」になっていく実態が描かれている。

企業論を突き詰めて、人間形成の真相まで描き出す、著者の洞察に敬意を表したい。

（2019 年 1 月 31 日　　哲）